

健康と温泉フォーラム 第四十八回月例研究会  
二〇一四年十二月二十四日 P H P 研究所東京本社一二階会議室  
基調講演講演録 講演者 谷口江里也

演題

世界の今における

日本文化の一つの象徴である

温泉文化の意味と役割

ただいまご紹介いただきました谷口江里也です。みなさんのなかには、お目にかかったことのある方もいらっしゃると思いますけれども、初めての方もいらっしゃると思いますので、簡単に自己紹介をいたします。私は基本的にいつも、空間のことを考えています。

空間というのは一般的には、建築空間のことを言ったりしますけれども、私にとつては、もっと広い意味を持っていて、時代とか文化とか、社会的な仕組とかも入ります。つまり、私たちを包み込んでいる広い意味での空間というのは、どういう要素によって構成されているんだらうか、それは何によって変化するんだらうか、というようなことばかり考えています。

空間というのは、基本的に自分を中心にして広がっています。で、空間というものには境界があつて、たとえば、私たちが今いる、この景色の良い部屋のように、床や壁や天井で区切られた空間とか建築空間とかが、一般的には空間と呼ばれています。この部屋には入り口にドアがあつて、そこを閉めると、その向うは見えませんが、私たちが目に入る空間というのは、この部屋だけになります。ただ、私たちは、部屋の向うにはロビーがあつて、エレベーターがあつて、というふうに、見えないドアの向うの空間があることも知っています。ただ、これは実際には目に見えないわけですから、これは自分にとつてはイマーシブな空間、頭の中にある空間ということになります。

ですから、実際には、私たちにとつては、そういうイマーシブな空間のほうが圧倒的に多くて、ほとんどの空間を、私たちはイマーシブな空間によって把握しています。そういう意味では、法律とか、時代的な価値観とか、憲法とかいうものも、実は、私たちの空間を大きく形作っています。

また法律というのは、普段は目に見えませんが、しかし法を犯したりすると、たとえば何かを盗んだりすると、実際につかまってしまうたりしてしまいますから、これは非常に強く空間を規定している、法の内側と向う側とを、明確に分ける境界の働きをしています。

バブルに時に買った、肩幅の大きいスーツなんか、どうも今はカッコ悪くて着れない、とかいうことがあつたりしますけれども、そういう意味では時代の美意識とか価値観というものも、意外と強い空間性を持っています。まあ、そういう空間の不思議さのようなものをいつも考えております。

具体的には、仕事としては、物によって空間を構成する建築空間と

か、言葉で構成された空間である本とか、ヴィジョンアーキテクトとして、多くの人が集まって行うプロジェクトなんかもやってきました。

企業などのプロジェクトというのも、これは人々の明日の営み空間を創り出す仕事だと私は思っています。資生堂さんとか、フジゼロックスさんとか、そういう企業の、プロジェクトを設計して、それでどこに向かうのか、何のためにやるのかというヴィジョンやコンセプトやプログラムをつくったり、ディレクションしたりとかいうこともやってきました。

まあほかにも、言葉と音で構成される歌をつくってみたりもしています。そんなわけで、いろんなアプローチからの空間づくりをしています。

ただ、建築空間を創るすべてのプロセスに関するのはかなり体力と時間を要します。以前は、たとえば銀座の資生堂ビルのように、構想から施工監理から、運営ヴィジョンまで、すべてのプロセスをおこなっていましたし、企業のプロジェクトなども、プロジェクト設計からプログラムからディレクションから報告書まで、みーんなやることが多かったのですけれども、最近は、空間創りにせよプロジェクトにせよ、実際にそれを具体的に始める前に、どこに向かってどのようなことを目指せばよいかという旗印のようなヴィジョンと、そこに至る道筋を設計するということを主にやるようにしています。

あとはいろんな本を書いたりしております。本のテーマは、主にアートとか表現に関することが多いですけれども、3.11の震災以降は、主に近代的な仕組をどうしたら乗り越えていけるだろうか、というようなことを、いろいろと考えております。

先日、合田さんから、この研究会で温泉ということを巡って何か話してくれないかというお電話がありました。

まあ具体的に温泉や日本の温泉地をどうするかというようなことに関しましては、これはもう皆様が常に考えておられることで、こうした研究会を五十回も重ねてこられているわけですから、私のようなものがとりたててお話しできるようなことはありません。

そこでとりあえず、あるべき空間というものを考えているものの立場から、つまりヴィジョンアーキテクトからみた時に、日本の温泉文化というものがどのように映って見えるかというようなことを私なりにお話ししてみようと思います。

タイトルは『世界の今における、日本文化の一つの象徴としての温泉文化』という、大変大それたテーマにあえてさせていただきました。

逆にいいますと、これくらいの大風呂敷を広げないと、日本の温泉というものは、包み込むことはできないのではないかなあと、何となく感じています。

なんとなく直感的に、日本の温泉文化は、簡単な見方でくくつてしまふことがとてもできないような多様性に富んだ、あまりにも大きなテーマですので、ご案内にもありますように、私なりの観点から、落語の三題噺じゃないですけども、三つの異なるアプローチから、温泉文化ということを巡って、私なりに思い付いたことをお話しさせていただきます、それで、皆様のお話し合いのタネにでもなれば、というつもりで、お話しをしてみようかなと思います。

一つ目は、『欧米と異なる日本文化の独自性と温泉文化』ということでお話します。

日本列島というのは、地理的、空間的に見まして、非常に不思議なロケーションを持っています。緯度としては、だいたい温帯に位置する海の中にそびえ立つ多くの島からなる島々の集まりですけども、とても都合のいいことに、なんと真ん中あたりで、暖流と寒流という海流がぶつかる位置にあつて、当然のことながら、南の回遊魚も北の回遊魚も両方獲れますし、南から湿った空気がどんどんやってきますから、雨も多くて、植生も非常に豊かです。

渡り鳥もやってきますし、地形も複雑ですから、魚もたくさんいます。とにかく昔から、海幸彦、山幸彦のお話しがあるくらいで、実に多種多様な食物が採れます。鮎や鮭も川を上ってきます。日本列島は、実に豊かな自然にめぐまれていて、それを利用して、日本人の食生活は実にバラエティにとんでいて、世界中で最も豊かな食文化を創り上げました。

ところがこのパラダイスのような島国は同時に、ご存知のように極めて過酷な地球の営みから出来ています。

ゆるやかに移動を続けるいくつもの巨大なプレートがぶつかりあうことによつてつくられていますから、火山は多いし地震も多く、世界中の地震の八割だかが、この列島で起きていて、そんなところに50基もの原発をつくるというのは、まったく狂気のさたというほかありません。

まあ、それはさておき、とにかくしょっちゅう地震や火山の噴火がおきますし、もともとそういう地球的な力によつて島々ができているわけですから、山は高く険しくて、雨はたくさん降るけれども、降つた雨は、あつという間に流れ下つて、海へと流れていきます。

おまけに、台風なんてものもしょっちゅう来ますし、それが山にぶち当たつて、わんさか雨を降らせて、たちまち水害に見舞われたりし

ます。今年なんか、冬になってもまだ爆弾低気圧なんてのがやってきて、とんでもない雪を降らせています。

つまり、人の手にはおえないばかりか、地震や噴火みたいに、予測さえも出来ないような過酷な天災がしばしば起こります。天災という言葉がいみじくも表しているように、これは天から降ってくる災害ですから、人間にはどうしようもありません。

こういう過酷な自然と、他に類をみないほど豊かな自然の恵とが混在しているところが、この日本列島ということになります。どんな文化もそうですけれども、基本的に文化というのは、風土によって育まれますから、日本の文化というのも、この、豊かさと過酷さを併せ持った風土によって育まれた独特の特徴を持っています。

そういう環境の中から、この列島に、そういう風土を反映した、自然を畏れると同時に自然の恵に感謝するという、非常にコンプレックスな文化が生まれました。

複合的であることは、自ずと多様性をうみますから、この国では、八百萬の神というように、自然のあらゆるものに神が宿るとして畏れ敬い、そしてそういう天の神・地の神様たちが、ありがたいことに天災を降らすことなく、めでたく作物がとれたり、食べ物がとれたりすることに對して、感謝したり、踊りを踊ってお祝いをしたりする文化を育んできました。

また、山が険しくてせつかくのきれいな水がすぐに流れていつてしまえますから、それを水田という、一種の貯水池にためてゆるやかに水を流すという稲作のための仕組みをつくりだしました。これはアジア独特の実にすばらしい発明です。

中東や、西欧などの麦の文化では、麦をつくるために灌漑をしますから、長い間それが続いていると次第に大地に塩分がたまってきて塩害がおこります。

そうなるとその土地は使えませんから、新たに森を切り拓いて畑をつくったり、他の国に攻めて行ったりします。スペインはいま、飛行機から見ると赤茶けた大地が広がっていますけれども、大昔は、どこもかしこも、国中をリスが地面に降りることなく動き回ることができたとか言われております。

イスラエルの隣のレバノンなども、旧約聖書の昔には、レバノン杉の大き木に覆われていたということです。とにかく、麦の文化というのは、塩害になりやすいので、領土の奪い合いがさかんに行われてきました。またローマ時代なんかには、どんどん森を切り拓いて、石の街をつくって、そのまわりを城壁で囲ったりしました。

しかし日本という島国では、山から流れる水を水田にためて、それを稲作に使って、ゆるやかに流しますから、どんなに水田を続けても塩害になりません。

しかもこれは非常に水深の浅い、ある種の干潟のようなものですから、これは生命の宝庫です。日本の自然は、水田という仕組みを持つことによつてより豊かになりました。トンボやメダカやシジミやタニシやホタルやカエルとか、とにかく実に多くの命が育まれて、世界に類をみないほどの多様性に富んだ豊かな自然になりました。

さらに、水田のまわりの集落では、いわゆる里山という、集落と山々の境にあたる部分を、入会地という、山と集落や田畑との一種の緩衝帯をつくり、それを共有地としてみんなで手入れをして、様々な果樹を植えたりもして、もともとは照葉樹の多かった日本の自然を、より多様性に富んだものにしてきました。

自然でも文化でも、豊かさを計る基準というのは、それが多様性に富んでいるかどうかというのが最もわかりやすい見分け方です。つまり、杉の木ばかりの山とかいうのは、生体系的には貧しいということになります。

話がそれますけれども、これは政治もそうです。独裁制みたいに一つの価値観だけ、それ一辺倒というのは、これは最も貧しい体制です。

二大政党などというのも、これは基本的に二項対立、たとえば、一神教の神であるヤウエイやイエスを信じるかどうかとか、敵か味方か、左か右かといったような、物事を対立させて、白黒をはっきりさせることによつて物事をすすめてきた西欧の、旧約聖書が源の、ユダヤ教やキリスト教やイスラム教的なものをベースにした社会ではじめて通用する仕組みであつて、実は、日本の風土とはほとんど相容れないものです。

それはともかく、この島国ではもともと縄文時代からすでに、豊かな山の幸、海の幸のおかげで、長い間、人々は平穏に暮らしてきたわけですけども、そこに水田というインフラが導入されたことで、そこに豊かな里の幸が加わりましたから、これはもう、文化的には、すばらしい条件が整ったことになります。

そういう場所で、自然の豊かさを享受しながらも、ときどき天から降ってくる災いを、それを打ち負かそうなんてことは考えずにひたすら恐れ、敬い、感謝もしながら、みんなで力をあわせ心を合わせ、なにかあつたら慰めあつて、自然と共に和を持って生きるという、非常にパッシヴな、つまり受動的な文化を育んできたわけです。

このパッシヴな感性は、反面、諦めやすいという日本人独特の性格にもつながっていますけれども、とにかく自然をおそれ、かつ自然に感謝して、今を生きるという類い稀な、めずらしい文化を育ててきたわけです。で、大変前置きが長くなりましたがけれども、さてこれくらいよいよ、そのこと温泉文化との関係です。

温泉文化というのは、これこそまさに、日本の自然の過酷さと豊かさが交差したところで成り立っています。

これはかよう亭の上口さんがいつもおっしゃっていますけれども、温泉というのは、この過酷な島国に暮らす人々に、自然があたえてくれたご褒美にほかなりません。

この天から降ってきた天災とは逆の、地から湧いてきた温泉に、地震も台風もない時に、平穏な日々の仕事の後とかにゆったり入りまして、自然がひとたび怒れば、それに対しては全く無力な人間が、ある意味では天災と天災の間の、つかのまの平穏なひとときがあることのあるがたぎに感謝して、体に何もつけずに真っ裸で、温かい湯の中につかって、「ゴクラク、ゴクラク」とか言いながら、一切を忘れて、母なる自然に身をまるとあずける。その一瞬の至福を愉しむというのが温泉です。

また稲刈りなどが終わった頃に、たまには遠出をして、有名な温泉地とか、知らない場所の知らない温泉に、日常から離れ、土地の人たちや旅人と、身分の違いも貧富の違いも、そういう世俗のことは一切とっばらつて、時には男女の違いさえとっばらつてしまつて一緒に、裸で、大自然の前では無力な一人の人間として、まったく無防備な姿で自然の恵としての湯に抱かれるという、強固な階級社会で男女の境も大きい西欧にはない、実に日本の文化のありようのエッセンスのようなものがそこにはあります。

最近では、その文化的や良さがわかる西欧人も多くて、最も日本的な文化として、温泉が大好きな外人さんが、たくさんいます。

しかも、お風呂から上がったら浴衣姿で、これまた水のように透きとおった日本酒などを飲みながら、自然が恵んでくれた、海の幸、山の幸、里の幸、川の幸、を味わうという、まさに今夜一夜の至福を愉しむわけです。

ですから温泉というのは、それを支えている自然的な条件とか、入り方とか、全てにおいて、日本文化の最上のありようを象徴する文化的な営みだと私は思います。

さて、二番目のテーマに入ります。

これもまた、『近代の問題点と温泉文化』という、とんでもなく大業なテーマですけれども、近代というのは、これは大雑把に言いますと、産業革命とフランス革命が合体して、主権在民の議会制民主主義と産業化社会という二本の旗を国がかかげて、物事をおしすすめてきた時代です。

ところがそのうちに、旗印の一本の主権在民の方は、立憲議会主義という、そういう国の仕組みがとりあえずつくられたということは、人類の長い歴史の中で画期的なことでしたけれども、しかし、やがて列強が産業化をおしすすめ、国力が増大するにしたがって、植民地などから収奪し、やがて国力競争となって、市民よりも国を全面に押し出して競争をするようになって、一本目の旗はボロボロになってしまいました。

それで産業化一辺倒になったものですから、二十世紀は、人類史上最悪の戦争の世紀になってしまいました。

で、細かいところは端折りますけれども、この近代の産業化社会のメカニズムの最大の問題点は、要するに、大量生産、大量消費による国力や産業の拡大を前提としているということなのです。

つまり、ほどほどということ、適正スケールという概念を、もともと持っていないということです。

近代のことになりますとつい力が入って、いろんなことを言いたくなってしまいますが、話をもどしますと、日本の農業というものは、もともとそれとは全くちがった仕組みで成り立っています。

アメリカみたいにならな場所です。単一の農作物をたくさんつくるといふのではなくて、百姓という言葉が示すように、狭い場所を工夫して用いて、そのかわりいろんな農作物を少しづつ、田んぼの畔に大豆を植えたり、生け垣の根本にミョウガを植えたり、フキを植えたり、田んぼの一つをレンコン池にしてみたりして、百の作物を育て、また藁で縄を編んだり草履をつくったり、裏山の竹でザルをつくったり籠を編んだり、囲炉裏でアユやヤマメを燻したりして、とにかくいろんなことをしながら、四季折々の多彩な作物をつくり、それを用いて、バラエティに富んだ豊かな食生活を育んできました。

その背景には、日本は気候の変動が激しいですから、単一栽培だとその作物が台風等でダメージを受けた時には、生きていけなくなってしまうということもあつたでしょうし、平地が少ないということもあつたでしょうけれども、そこにも、狭い場所で工夫をしながら自然とともに持続的に生きるという、日本的な知恵が働いているように思われます。日本の文化の多様性は、そのような多様な風土と共に生きるなかで育まれてきたといえるでしょう。

温泉も同じです。これはあくまで地の恵みであって、まあ最近では地下をどんどん掘って温泉を強制的に掘りだしていますけれども、もともとは、幸いにも湧き出た温泉を、ありがたく頂戴するというところから始まっています。

今でも、よその家に行ってお風呂に入る時に、お風呂を頂きますというようない方をします。たまたま温泉が湧き出たところにしか温泉はないわけで、それが辺鄙なところであろうと風光明媚なところであろうと、とにかくそこに出向いて行って有り難くいただくわけです。

それで身体を休めて、また日々の生活にもどるわけです。

なんでもかんでも人の手や機械で大量につくりだして、それをどこでも同じように享受しようという近代とは、これは対極にあります。

つまり温泉というのは、人の手でつくれるものではないので、限られた場所にある温泉に向いて行って、地の恵である温泉を特別なものとして楽しむという、これもまた受け身であるからこそ、感じ取れる幸せ。つまり、めったにはない、有り難いことだからこそありがたい、という日本文化の特徴が温泉には、これまた如実にあらわれていると思います。

さて、三番目のお話です。

今度は、『総合的な文化空間としての温泉文化』というお題です。

西欧的な空間と日本的な空間の最も大きな違いの一つは、西欧的な空間では基本的に、内と外を明確に区別しますけれども、日本的な空間というのは境界が非常にあいまいなことです。

たとえば日本では、昔からのお百姓さんの家には、玄関も一応ありますけれども、家のつくりとしては、南の方の壁面などは、雨戸があつたりはしますけれども、昼間は、だいたい全部開けられるようになっていて、そこには縁側というものがあつて、その内側に障子があつて、その奥に座敷があります。

この縁側というのは、外だか内だかよくわからない、どちらともとれる空間です。

私も以前、スペインでの生活から日本に戻ってきた時に、先祖が庄屋さんだったという友人が持っていた築二五〇年くらいの、かやぶきの家を貸してもらってしばらくそこに住んだことがあるので良く分かるのですが、そこでは朝の早くに、となりのおばあさんが急に縁側から顔を出して、「うどんをうったから食べねえ」と大きな声で言つて、それで起こされたりします。

そういうときは、おばあさんはほとんど玄関から入ってくるということはありません。

私の方も、寝ぼけまなこで縁側に行つて、「すみませんねえ、朝の早くから」とか、多少の嫌みなんかも込めてお礼を言つて、お茶を一緒に飲んだりするのも必ず縁側で、いちいち家の中の座敷に上がったりはしません。

またそういう昔の家には、土間というのがあつて、若い人たちは分らないかも知れませんが、まあ、今日来ていらつしやる方々は良くご存じでしょう。土間というのもまた、家の中ではありますけれども、外のつづきでもあるような不思議な空間です。

そこにはかまどや洗い場とかもあつて、料理はだいたい土間でします。また土間には、ちよつとした農具とか、畑で採れた泥のついた里芋などをいれておく桶なんか置いてあつたりします。

土間と座敷との間には、基本的に板間があつて、それが土間と座敷との中間地帯になっています。そこにはいろいろが切つてあつたりもし、非常に面白い空間です。

近所の人があつて来た時に、板間に腰掛けてお茶を飲んだりすることもありますけれども、近所の人たちは、座敷には、よほどのことがなければ入つてきません。

座敷には遠くからのお客さんとか、お葬式だとか、結婚式のおよばれだとか、そういう特別な時にしか入りません。

そういう時には、ふすまをとつぱらつて、家全体が宴会場になつて、たちまち座敷は特別な場所になります。

土間で近所のおばさんたちが総出でお手伝いをして、料理をつくつて座敷に運びます。西欧的な建築空間というのは、寝室とか、子供部屋とか、居間とか、食堂とか、わりと目的が決まっていますけれども、日本的な空間というのは、それとはかなり違います。

そういうことを考えると、温泉宿というのは、そういう日本文化の特徴のようなものを凝縮したようなスタイルを持っています。

裸になつて入るお風呂は、特に露天風呂などは屋根や庇があつたりもして、一応家の続きの離れのようなかたちをとっていますけれども、しかしお風呂は外とダイレクトに接しています。

温泉自体が、地中から湧いて出てきているわけですから、ある意味では自然そのもので、しかしながら温泉はあたたかくて、裸でいても寒くないわけですから、そういう意味では、温泉に入っている人は、全く無防備な裸であるにもかかわらず、温泉と家、つまり自然と人工物の両方から何気なく優しく守られているということになります。

昔ですと、例えば寝るときも枕もとに刀を置いているお侍さんでさえ、刀を置いて裸になつて、身分も何も関係なくお風呂に入るわけですから、そこでは身分の境がないわけです。

温泉があらゆる境界を取っ払ってしまいう働きをしています。それと同時に、なぜかそのひとときだけは、自然の優しきや人の優しきなど、なんだかいろんなものに守られているような一種の安心感があつて、それが温泉が文化である証しでしょう。

考えてみれば、一步外に出たら七人の敵というような人間社会において、この安心、心が安らかであるというのも、かけがえのない状態です。これもよく上口さんがおっしゃることですけれども、母親の胎内にいるようなひとときであるわけです。

しかも身体が暖まって座敷に入ると、今度は、土地の四季折々の食べ物やお酒が待っているわけです。

お料理はそれが贅沢かどうかというようなことは関係なくて、大事なのは自分でごはんをつくらなくても、伝統的な日本家屋における習慣の中では、特別の時しか入らない座敷で、ほかの人がつくった料理を楽しむという、そういうことが特別であるわけです。

しかもその空間のしつらえも、その地方の建築様式のようなものが自ずと表現されているようなことが多くて、そんな座敷の中から、雪見障子の向こうの庭を見ながらゆつくりしたりするのは格別です。

ついでにこの庭というのも実に日本的な空間です。日本の庭は、ベルサイユ宮殿の庭みたいに、恋人と愛を語りながら散歩するような場所ではなくて、基本的に室の中から眺めるもので、外であるにもかかわらず、家の内部でもあるような不思議な空間です。

しかも庭の池には石が置いてあったりして、それが蓬莱山を表していたりしますから、そこでは、現世と来世の境にいるような時空が演出されています。

ついでに言いますと、この演出を最も見事に空間化しているのが、京都の銀閣時です。実は私の友人が住職さんとお友達で、ずいぶん前になりますけれども、門を閉めてから、中に入らせてもらいました。

銀閣寺の一階の水際の広縁にいますと、すぐ側に池があつて、池の生命力のようなものがひしひしと感じられます。

ところが二階に上がりますと、これはもう別世界です。三方の小さな窓を開けて中に座ると、もう、まわりを取り囲んでいる山の緑しか目に入らなくて、なんだか一気に天空に上ったような、この世でありながら天空にいるような、そういう気分になります。

まあ、そこまでではなくても、ある程度の温泉宿には、基本的にそういう日本の空間文化のエッセンスのようなものが備わっています。

まあ長湯治をする湯治湯などでは、自炊をしたりしますけれども、

これは病気を治すという目的がありますから、これはまたちよつと趣向が違います。

ただいわゆる温泉宿には、そういう日本文化のエッセンスがコンパクトに凝縮されていて、そこで三味線の音を聞いたりなどして、文化の時空に遊べば、これはもう自分がどこにいるかわからなくなるというか、日常と非日常の境行ったり来たりするような、非日常だけでも、実にリアルで心地よい至福の時になるわけです。

しかもそこで一晚、見知らぬ他人の家なのに命をあずけて泊まったりします。そうして、ひとときの安心と極楽を堪能するからこそ、また、いつなるとき地震がくるかもわからない現実の世界に、すっかり元気になって帰っていけるわけで、温泉というのは、基本的には豊かだけれども、明日は何が起こるかは分からない、日本人の営みを支える、一つの仕組みとして日本の文化の中に位置づけられると思います。

つまり、日本文化になくはならない一つの生命的なインフラにほかならないということです。

以上、温泉を巡って三つの方向からお話しをさせていただきました。

この三つをあえてまとめるようなことはしません。というより、一つの脈絡ではまとめきれないのが温泉、あるいは近代的な一対一対応の、単純な目的とつなげるようなかたちでは語りきれないような、極めて境界があいまいな、しかしながら自然と文化と食とが融合しているようなのが温泉文化だということだと思います。

今日のお題の、『世界の今における、日本文化の一つの象徴としての温泉文化』という事に関しても、まあ、今は近代国家を支えてきた諸々の仕組みや、近代金融資本主義が完全に限界を迎えてしまっていて、いつクラッシュしてもおかしくないような状況です。

そんななかで、自然と共に生き、自然を畏れつつも感謝して、共に移ろい、つかの間の幸せを、心と五体のすべてで、ありがたいものとして味わうという、温泉には、そういう日本文化の象徴みたいなところがあつて、これからの時代ということを考えてと、そこには、とても大切な世界的で先進的なテーマがひそんでいるように思います。

心と体、物と心、自然と文明、そういうものを分けて考えてきた近代とはかなり違う、もつと成熟した、これからの世界が大切にしなければいけない要素が、何もかも一緒になつて、湯けむりのなかで、ゆらいでいるようなのが、温泉文化ではないかと思えます。

ずいぶん、あちらこちらと道草をしながら、お話をいたしました。先ほどから合田さんが、なにやら物言いたげにこちらの方を見ておられますので、ちようどお後もよろしいようで、ということ、私のお話

しを終わりたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

## 質問

井上先生

とても興味深いお話でした。縁のこととか、日常と非日常のこととかもお話されて、私が今考えていることも重なり合って、心が震えるような感動を覚えました。ありがとうございます。

一つ質問がございます。「非日常だけれども、実にリアルで心地よい」ということをおっしゃられましたけれども、そのあたりをもう少し、ご説明いただけますでしょうか。

## 谷口

ありがとうございます。日常と非日常が溶け合ったような状態というの、実は非常に文化的な状態なんだと思います。

たとえば芭蕉が、何かを見て感動して、そのことと義経のことを重ねたりして句を詠んだりしていますけれども、ここにあつてここに無いようななにかを感じたり、それを表したりすることは、非常に詩的というか、文化的なことだと私は思うわけです。

自分は、目の前にあるリアルなお堂を見ているのだけれども、しかし同時に、遠い時空の義経の面影をそこに見ているという、俳句というの、まさに、日常と非日常の間にあるというか、そのどちらでもあるような空間をたのしんでいるわけで、それは日本人なら誰もが分かるような、そういう文化的な何かだと思えます。

この窓の向うに、雲が浮いています。それ自体はリアルに見ていることですけれども、その向うになぜか、亡くなったお母さんのことを思い浮かべたりして、それを俳句にしたりして、そういうことかなと思えます。

近代というのは、日常、非日常にかぎらず、いろんなことを対立的に分けて考えるてきました。

けれども人間というのは、たとえば、昨日と同じように暮らして行けたら、と思う一方、どこかで生活を変えたいと願っていたりします。好きとか嫌いとかいうのも、好きという感情の中にも嫌いな要素があったり、嫌いななかにも好きなことがあったりします。

恋人をみつけたばかりの時なら頭の中が好きでいっぱいということもあるでしょうけれども、だいたいは、人間の感情というのは、白黒がつけられないような、コンプレックスな状態になっていて、じつはそれが自然なんだと思います。

仕事と遊びというのも、本来は分けられなくて、遊びのなかに仕事

の要素が、仕事の中にも遊びの要素が入り込んでいます。

ただ近代は、何時から何時まで会社に行って、それでお金を貰うのが仕事みたいになってしまいました。しかしそうすると、遊びをお金で買ったたり、お金を貰えない家事なんてのは、仕事とは見做されなくなるようなことになってしまったりします。

日常と非日常も、その間を行ったりきたりするから面白くて、文化的なものには、そういう要素が必ずあると思います。

電車の中で本を呼んだりするのはリアルな行為ですけども、しかし意識は、本の中の空想のなかには入り込んでいて、そこを行ったり来たりするのが面白いわけです。

質問

甘露寺先生

大変興味深いお話でした。こう言うことを聴きたいと、常々想っておりました。私の言っております、ファジーということもつながっていて、温泉を語る場合には、そういうことが非常に大事だと思います。ありがとうございます。

谷口

こちらこそ、まことにありがとうございました。曖昧さというのは、ある意味では創造や創造の源泉です。

ハッキリしていることは、見てしまったらそれでお終いです。人間というのは不思議なもので、分かってしまった途端に、そのことについて考えるのを自動的に止めてしまうようなところがあります。

もしかしたらこれは、人間が動物でもあることと関係しているかもしれない。動物にとつて重要なことは、目にした物が危険なものなのか、獲物なのかを瞬時に見抜くことだからです。危険がなければ、そのことはもう忘れて、放っておいたってかまいません。

でも、なんだか良くわからないもの、曖昧なものはどうしても、何なんだろうと考えます。そこで人間のもう一つの能力である想像力が働いて、いろんなことを考えます。ですから、多様な要素が入り交じっていて、しかも気持ちのいい温泉というのは、非常に創造的な場、つまり文化の創造につながる、文化や美の源泉なのだと思います。